令和４年度 東京都自立支援協議会「交流会」の報告について

都内自治体の自立支援協議会関係者を対象とした交流会が実施され、本区からは、本会委員１名、事務局２名が参加した。以下、交流会について報告する。

１　交流会の概要

タイトル	地域での暮らしに欠かせない社会資源を考える
日時	令和４年８月 22 日（月）13:00～16:00
会場	東京都社会福祉保健医療研修センター
参加者数	49 名（13 区、９市町）　※当日配付された名簿一覧から抽出
プログラム	**⑴話題提起** ・地域で暮らす当事者・家族のお話 ・地域移行を進める支援者のお話 **⑵グループ討議** ・話題提起の感想 ・地域で暮らすための社会資源をつくれているか？

２　プログラム内容

（１）話題提起

発題者（障がい当事者、支援者、家族など）の発言内容について、以下のとおり抜粋して紹介する。

〇12 歳から統合失調症を発症し、入退院を繰り返した。その際、長期入院者の存在を知った。その経験が、自身が地域移行を支援する根幹となっている。

◆地域移行の大事なポイント

①知識（外の世界を知ってもらう。それが希望をもたらす。）

②人とのつながり（入院しているときに訪ねてくる支援者など）

③退院後の夢（実現できるかよりも、「〇〇をやりたい」といった希望）

人は、衣食住だけでは満足できない生き物である。障がいの有無に関わらず、夢や希望、やりたいことを持つことはできる。生きるエネルギーになるため、その夢を後押しする存在が必要。

〇自立に向け、宿泊型自立訓練である通勤寮に入寮。遊ぶことにお金を浪費してしまう。食事は毎朝野菜を食べ、週一で魚を食べるよう、健康に気をつかっている。仕事では言われたことしかできず、コミュニケーションが得意ではない。新しいことに挑戦しても、学ぶ必要のないと思ったことは忘れてしまう。しかし、将来は楽しめる人生を送りたい。自分の心の中まで他人に決められたくないと思っている。

〇息子が重度の知的障がい者である。３歳で重度判定、小学校は特別支援学校に

通った。親が高齢になったときのことを考え始めたとき、支援者からの後押しを受け、息子は一人暮らしを開始した。
住まいに関して、障がいがあることや、日によって異なるヘルパーが訪問することなどにより、不動産がなかなか見つからなかったが、現在の場所に住んで３年になる。一人暮らしを始めるまで、息子のことを一番理解しているのは親だと思っていたが、ヘルパーを使い始めてからは、これまで知らなかった息子の一面を知ることができた。
自立した生活をめざして行動するとき、すぐに施設へ入所するのではなく、支援者がもう少し頑張れば地域で住める可能性がでてくる。地域で積み重ねた人間関係を手放さず、これからも地域で生活できる点は、本人も良かったと言っている。親亡き後、支援者亡き後、現在の住宅が住めなくなったらと、不安はまだまだあるが、近隣住民が少しでも知的障がいを理解してほしいと願う。

（２）グループ討議

６名×８グループに分かれ、ファシリテーター（事務局が用意）の進行のもと、話題提起の感想と社会資源について議論を行った。
グループ討議の内容について、全体発表から以下のとおり抜粋して紹介する。

〇支援者としての姿勢を再確認できた。ピアサポーターの力をもっと大きくしていきたい。地域の中でのつながりや顔の見える関係づくりが重要。

〇地域移行の制度が実現された際には、流れ作業ではなく、アセスメントを密にし、本人の意向を組んで行うことが大切。

〇些細なことでも相談できる人、ネットを上手に活用すること、体験の重要さを学ぶことができた。

〇病院にも地域移行を理解いただくよう、努めていく必要がある。

〇居住支援協議会との連携、住まいの問題、その解消に向けた仕組みをどう作り上げていけるかがポイント。自立支援協議会でも検討していく必要性があるのではと考える。また、不動産との連携、不動産への普及啓発も重要。

〇地域のグループホームが少ないため、空き家対策としてグループホームを増やしている自治体もある。

〇「つながる」という言葉がキーワード。地域で暮らすため、相談者につながっている人は氷山の一角ではないか。子ども、障がい、高齢と、縦割りになっている状況だが、横断的につながっていきたい。また、情報もバラバラに発信されているため、情報を知る、ということも課題である。

〇長く暮らすことができていても、暮らしの質（内容）が良くないといけない。既に制度としてあるものを活用するよりも、地域や身近にあるものを充実させていく方が大事なのでは。